

富山県高岡市

西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ



1986年3月

高岡市教育委員会

発刊にあたって

遺跡は、「過去に生きた人々の生活や行動の跡を残している土地」です。「埋蔵文化財包蔵地」とも呼ばれるように、その多くは土中や水中に埋もれています。高岡市の西山地区には、繩文・弥生・古墳時代からの遺跡が数多く残されています。また、本年度発掘調査しました英野下遺跡には、奈良・平安時代から中世・近世に至るまでの遺物が非常に豊富でした。これら遺跡は古代史の解明に重要な資料であり、本市にとってかけがえのない文化財であるといえます。

分布調査や発掘調査によって見つけられた生活用具は、各時代にそれぞれ生きることに真剣に立ち向かった祖先のいぶきが強く感ぜられます。発掘調査の結果、眼前にあらわされた過去の人々の生活の跡が与える感動は、時間をこえた人々との心のつながりといえるでしょう。先人の工夫は、現代生活のゆきづまりを開拓するために意外なヒントを与えるかも知れません。歴史は常に新しい意味や価値をもっています。

ところが、消滅した遺跡も多々あります。自然環境と一体となった遺跡が市民に保護活用されることが望れます。この小骨子は不備な点が多いことでしょうが、文化財保護のための基礎資料となれば幸いに存します。

おわりに、調査の実施にあたり、ご協力いただいた地元の方々、関係機関に厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月 高岡市教育委員会

目 次

発刊にあたって	
例 言	
I. 調査区域の環境	1
II. 調査の概要	2
III. 紫野遺跡採集の中国製磁器について	6
図 版	
第1図 航空写真	1
第2図 中国製磁器実測図	7
第3図 中国製磁器写真	7
第4図 遺物実測図	8
第5図 遺物実測図	9
第6図 遺物実測図	10
第7図 石堤柏堂古墳群実測図	11
第8図 遺跡写真	12
第9図 遺跡写真	13
第10図 遺物写真	14
第11図 遺物写真	15
第12図 遺物写真	16
表 1 石堤地区古墳群一覧表	7
引用・参考文献	6
別添折り込み図	

大字・小字区分図及び遺跡分布図

例 言

1. 本書は、富山県高岡市西山丘陵の埋蔵文化財第3次分布調査概要である。
2. 調査は、昭和60年度国庫補助金の交付を受けて、高岡市教育委員会が実施した。調査は、昭和60年4月～昭和61年1月の間（実働45日）である。調査対象面積は、約700haである。
3. 調査参加者（敬称略）
調査指導者 富山考古学会会員 小島俊彰 西井龍儀
調査担当者 高岡市教育委員会社会教育課主事 大野文郎
調査補助者 富山考古学会会員 田畠健二 坂田悦康
新保定信 大野一成 古本充宏
資料整理 富山考古学会会員 出畠健二 坂田悦康
人野一成
4. 本書作成にあたっては、西井龍儀氏から資料の提供、ならびに指導・助言をいただいた。また、富山県埋蔵文化財保護主事、宮田進一氏からも貴重な助言をいただいた。前記の両氏から玉稿を賜り、ここに感謝する次第です。
5. 本書の編集・作成には、西井・田畠両氏の協力を得て、市社会教育課主事、大野があたり、文責は文末に記した。
6. 本地図作成にあたっては、大幅な縮尺の図葉を用いているので、所在地の確認に手間取ることも考えられる。詳細については、当市教育委員会社会教育課に連絡されたい。



第1図

昭和22年撮影

I. 調査区域の環境

本年度調査区は石堤地区（石堤、麻生谷、柴野、西広谷、勝木原、山川）と国吉地区の一部（境、八口、四日市）である。広谷川は勝木原を、谷内川は花尾を源とし、いずれも開析谷を造り小矢部川に注ぐ。

石堤、麻生谷、柴野の3地区の平坦部は、かって小矢部川の氾濫原や川跡であり、石堤の北浦、麻生谷の北浦、渓分などに凹地がある。また、柴野の諏訪社の老杉に大舟を繋ぎ止めた伝承があり、麻生谷に「流れ森」というところがある。現在は、山麓に五位庄用水、平地に佐賀貢・下八ヶ用水が小矢部川より水を入れ、肥沃な水田地帯を満たしている。この平野部にかって「水見往来」が通り、往来沿いに市が開かれ十日市、六日市、四日市、三日市などの地名が残り、国吉地区と同様に長い歴史を偲ばせる。

また、当区域の丘陵地には、縄文時代から中世に至るまでの遺跡が多く、明治時代以降からの荒地開墾、農地改良によって多数の遺物が出土し、住民の遺跡に対する関心も高い。

（大野）

II. 調査の概要

1. 柴野春日古墳

城ヶ平の北端、広谷川に面した平坦な台地のへりに寄って、1辺約10m、高さ約1.5mの方墳状をなすところがある。周囲を除く3方には、周囲とみられる幅約1.5mの落ち込みがめぐり、墳丘は南側隅に一部地崩れがあるほかは原形をよく残しているとみられる。墳丘上には石碑の類はなく、方墳、経塚、土塔などのいずれとも考えられるものの決め手を欠く。なお、この北側、広谷川の対岸には江道横穴墓が位置する。

2. 柴野口割古墳群

口割の城ヶ平（標高90.8m）から、南東、東、北の3方向に分かれる尾根のそれぞれに古墳が分布し、それぞれをI、II、IIIの支群とする。

I支群では、南東方向へ張り出した標高約72~75mの尾根先端に3基の方墳が並ぶ。尾根幅で墳丘の大きさが制約されながらも、尾根の基部側で最高位にあるものは約16m×18m、高さ約2mと最も大きい。これに併約8~9mの2基が続くが墳形は明確ではない。さらに尾根先端の墳丘よりやや下ってテラス状の平坦面がある。ここから尾根は2方向へ分岐するが段線は対称形でのび、平野側からは3角形の山棱がよく眺望できる。

II支群は、山頂に残る中世の山城とみられる郭内の墳丘状をなす2ヶ所に加え、そこから大きく断ち切られた空堀をはさみ、東側の尾根に1列に並ぶ5基の方墳と、さらに尾根を下った位置にある2基の円墳からなる。山頂の2基は径約10m、高さ約1.2~1.5mと低平で、のろし台など城郭に伴う遺構とも考えられ、尾根筋に段状に連続する方墳も、城郭の防御施設とみられぬこともないが、小規模ながら平坦面にもあることや、段状に連続するものは約17m×15m、高さ2~3mで、平野側をより大きく見せていること、2基単位の傾向が伺われることなどから古墳と推定しておく。また、これらより下位にある2基の円墳のうち、1基は頂部に盗掘穴とみられる落ち込みがある。

III支群は、北側へのびる尾根にあり、先端側に1辺が約30cm、高さ約4mの墳丘と、基部（南）側の長さ約34m、幅約20m、高さ約2.5mのやや不整形な墳丘状部が連続し、合わせると長さ60mを越える前方後方墳状の形となる。後方部と見たてた墳頂には、径約13mの平坦面があり、ここにさらに併約7.5m、高さ約0.7mの円墳状の高まりが重なる。各部分の形が不明確であり、前方部、後方部とみなした中軸がややずれることもあるが、前方後方墳とは決め難く、城郭との関連も想定されるところであるが、古墳の可能性があるとの指摘にとどめる。

これらの3支群のほか、山裾にあたる柴野集落背後の台地には、標高約40mの通称ヘドの山に径約10mの円墳とみられる2基があり、VI支群とする。今回の調査でも、古墳と関連する遺物は、口割古墳群では未発見である。

3. 麻生谷殿谷内古墳群

通称テージド（大神堂か）地内の尾根上に、1辺約20m、高さ約2.5mの方墳がある。やせ尾根の斜面がやや平坦となったところで、標高約66mを測る。墳頂は約8m×9mの平坦面で、東側の墳堀の一部に崩れがあるほかは墳形をよく残している。この尾根を登った標高約78mの分岐点には直径5~7mの円墳状の高まりが3ヶ所あるが、いずれも高さが約0.5mと低く、古墳とは断定しがたい。

4. 石堤柏堂古墳群

石堤浅井神社の背後に続く尾根上に古墳が並ぶ。これらは標高約60~63mで南東へ張り出す尾根上にあるものと、そこからさらに南へ派生した、標高約36mの1段低い尾根上にあるものとの2支群に分けられる。高位面の支群では7基の円墳と方墳かとみられる1基がある。直径25mを超える群中最も規模の円墳は、尾根の奥に位置し、そこから併8~13mの円墳が1列に並んで、先端では横に2基が並ぶ。どの古墳にあっても墳頂部に落ちこみがあり、盗掘穴とみられるが、一部には開墾や樹木の掘り取りによるものもある。

低位面の支群では4基になるとみられ、そのうち2基が盗掘による破壊を受けている。そこでは30~40cmくらいの岩崎石が散在しており、古墳の石室材と推定されるが、小堂宇の礎石とみられぬこともない。他に副葬品などの遺物は発見されず、この古墳群から出土した遺物も不明である。(第7図)

5. 柴野(城ヶ平)城跡

口割地内の最高位にある通称城ヶ平(標高90.8m)は、東西約52m、南北幅約13.5mの略S字状の平坦面を有し、ここから東西南北の4方へ続く尾根に対し、いずれも幅4m~7m、高さ3~4mの空堀で断ち切っている。この堀底とはほぼレベルと同じくして北側では幅2~3m、南側では約6mの平坦面がとり巻くようにめぐる。平野側を望む南東面は比較的ゆるやかな地形が続き、平坦面もあるが他は急峻である。通称ウマカケバの地名もあり、原形をよくとめた中世の山城跡と考えられる。

6. 柴野高ノ宮城跡

柴野八幡神社のある古墳台地の先端部に台地を断ち切るような空堀があり、郭とみられるところがある。標高約42m前後で平野部との比高差が約25mある。西広谷の入口を掌握する位置にあることから、柴野城と関連した砦とみることもできよう。

7. 麻生谷殿谷内城跡

新生園の背後に続く尾根が谷頭と接するところに、三方に分かれる尾根をそれぞれカットして空堀としている。単独の城郭とするほどの規模、構造でなく、柴野城と関連するのであろう。

8. 柴野守善寺遺跡

「天文21年(1552)……」在銘の千手観音立像が残る守善寺跡の前面にある小さな谷一帯が遺跡で、守善寺堤から広谷川までの約250mにわたり、須恵器、土師器、珠洲陶の散布がみられる。遺物が細片で時期判別はしがたいが、奈良時代以降、中世に及ぶものとみられる。

9. 柴野遺跡

以前から知られていたアサバタケA(富山県遺跡地図No.126)、とアサバタケB(No.127)を含む広範囲にわたる遺跡である。須恵器、土師器、珠洲陶片があるがいずれも小破片である。奈良時代後半から平安時代にかかる須恵器が多く、一部に末窓の須恵器と似るものがある。(第6図7~17、21、22、図版12)

10. 麻生谷遺跡

昭和45~47年の開場整備工事の際、地下約1mから出土した土師器が地元の丸山 池氏により採集保管されている。複合口縁に横線をもつ大ぶりの壺や、長頸壺、高杯などがあり、古墳時代初頭、月影期のまとまった資料である。周辺からも奈良~平安時代の須恵器や、珠洲陶が発見されており柴野遺跡とつながる大規模な遺跡となった。(図版11)

11. 八口遺跡

広谷川右岸で対岸の八口遺跡と接し、遺物内容も概八口遺跡と似る。第6図20の珠洲陶片口鉢が耕作時に出土しており、第6図18の土師器高杯、19の須恵器蓋などがある。

(西井)

12. 麻生谷新生園遺跡

標高約25m程の開折谷部にある。谷の奥部に旧大沢神社がある。

昭和46年の新生園建設に伴う土地整備の際に発見された遺跡である。縄文土器、打製石斧、須恵器、土師器等が出土した。現在は、新生園の東側はグランドに、西側は空地と作業園となっている。東側は消滅したが、西側の作業園では、現在でも須恵器片、珠洲陶器片が露出している。

13. 勝木原宮の前遺跡

子塙川の上流、勝木原の奥山に俗称「宮の前」がある。川岸段丘面全体が縄文時代中~後期の遺跡である。昭和10年の

開墾の折に、多数の石斧、石鎌、土器が出土した。また、昭和29年の林道開設の際にも、石斧、石棒、繩紋土器（串田新式～氣屋式）が出土した。

14. 藤木原オジャラ遺跡

藤木原御屋敷地内に俗称「オジャラ」がある。標高約220mの約2haの範囲をもつ台地であり、現在は切り拓かれた畑地である。明治40年の開墾の折に多数の石器、土器が出土した。昭和39、40年の両年に高岡工芸高等学校地区地理歴史クラブにより調査され、石鎌、石錐、打製石斧、磨製石斧、刀器、砥石、石棒等多数検出された。

15. 石堤長光寺遺跡

長光寺北西側の段丘末端に位置する。繩文土器、土師器、須恵器、土錐等が出土している。現在は墓地である。

16. 石堤遺跡

谷内川東側段丘末端に位置し繩文土器、土師器、須恵器、土錐等が出土している。谷内部落の入口でもあり、広い範囲をもつと推定されるが、今回の調査で範囲を限定するに至らなかった。

17. 谷内A遺跡

谷内川東側段丘末端に位置し土師器が出土している。現在は畠地である。

今回の分布調査により、遺物の分布状況と地形を考慮して、麻生谷A・B・C遺跡を麻生谷遺跡に、アサバタケA・B遺跡を柴野遺跡に包括することにした。また、西広谷遺跡は廻場整備事業により消滅。

(大野)

18. 末麻跡

高岡市域では唯一の須恵器窯として、早くからその存在が許りながら、西広谷地内の牧場造成により消滅あるいは埋没したかとみられていたが、今回の分布調査において灰原を確認し、窯跡も良好な状態で存在することが推察されるに至った。また、西広谷小学校では末麻跡出土の須恵器やその着破片、窯壁碎片が保管されており、これらと末麻跡の灰原採集遺物が胎土、焼成、器形の特徴が一致し、同一窯のものとの確証を得た。

窯跡は主要地方道高岡・羽叶線と、林道広地線の分岐点へ張り出した山地の、急斜面を登りつめた平坦面に浅く切れ込んだ小支谷北斜面にある。西広谷字桜野が正しい地名だが一般にはスエ(末)と呼ばれており、須恵器と関わる地名としても注意されるところである。標高約120m、ふもとの道路とは70mを越える比高差がある。

灰原は幅約20mの広がりをもち、窯体数は不明ながら灰原の規模から、複数存在することも考えられる。灰原に接して大池とよぶ小さな水池があり、かってはここに清水が湧き、まわりに平坦地も存在したと伝えるが、現在北側に隣接する牧場造成で半ば埋まりかけている。

須恵器には杯蓋、杯、皿、双耳瓶、甕、鍋の器種のほか円面碗があり、杯類の量が多いのに比べ甕は少ない。

杯蓋 つまみのないA類（第4図6～8）と、頂部につまみを有するB類（第4図1～5）とに分けられる。A類では径12～14cmの小ぶりのものが多く、B類では径17～19cmと大ぶりの傾向がみられるものの、小破片によるため法量と器形の関連は不明な部分が多い。器面調整はB類では頂部にヘラケズリがなされるのに対し、A類ではヘラキリの今まで、端部にかけ内外面共ナデ調整し、端部は水平面をもち下方へ屈曲することでは共通した形をとる。端部を丸くおさめるものは見当らない。

杯 無高台のA類（第4図18～36）と、有高台のB類（第4図9～17）がある。全体に焼成によるゆがみが著しく、正確な法量を把握しにくい。A類では口径12～13cm、底径6.5～7cm、器高2.5～3cmとなるA I a類（第4図18～28）と、口径15cm前後、底径5.5～6cm、器高4.5cmのA II b類（第4図30～34）、A II b類をやや小ぶりにした口径12cm前後、器高約4cm（推定）のA I b類（第4図35～36）に細分される。

A I a類では底部かへラキリで、立上りはやや内湾しながら大きく外傾し、底部との移行点では外面がややくびれ、内底面では立上りとの線が明確となる特徴がある。同類に入れたが4図28は他に比べ器高が大きい。これに対し、

A I b、A II b類は底面に回転糸切痕を残し、A I a類とは製作手法が相違する。底部から立上りへの移行もなだらかで器厚もあるが、内面をヘラミカキをするところに特徴がある。29は出土地不明。

B類でも法量差から口径11~12cmのB I類（第4図14~17）、口径15~16cmのB II類（第4図9~13）とに分けられる。B I、B II類とも底面はヘラキリのまで、貼り高台がつく。底部から立上りにかけての特徴は杯A I類と似るが、外傾度は小さく、底部に対して立上りの長さは大きい。

皿 杯との判別はし難いが、器高が小さく、口縁の外反するものを皿とした。これには無高台のA類（第5図3~5）と、有高台のB類（第5図1、2）があり、口径は約12cmとほぼ共通し、底面も回転糸切痕を残す。B類の1と2は貼り高台の形に差があり、1のような細い高台は、頭川閣尽遺跡の土師器に類似するものがある。皿の量は多くない。双耳瓶（第5図12~14） 破片の量では杯類に次いで多く、法量差もあるとみられるが、全体の形を伺い得るものはない。口縁部は外反し、水平面を残して上方へ立てる手法は各個体で共通する。耳の部分や、それに続く凸帯、肩の部分の破片などもあるが図示しなかった。第5図15、16、19の底部は双耳瓶のものであろう。底部が円盤状に剥離したもののがいくつかある。

壺 個体数は少ないが、中型~大型の壺がある。第6図1、2の口縁部は外反し、端部が下方へ垂れる形状となり、頸部以下は内面に同心円あて具痕、外面に平行叩き痕となる。内面の平行あて具痕や、同心円との併用するもの（第6図4）もある。第6図3は内面に放射状あて具痕がある。

第5図9~11は、長胴壺とみられ、口縁は親指をくの字状に折り曲げた断面形状である。口縁部の内面や胴部上半外面上に浅いカキ月痕をとどめるが他はロクロナデで調整され、胴下半分では内面同心円、外面が平行あるいは格子状の叩き痕を残し丸底となる。

鍋（第5図6~8） 長胴壺と似た口縁形状で、口縁部の内外面はロクロナデ、頭部以下に外面では斜め方向のヘラケズリが加えられ、内面では不整方向のナデ調整がなされる。

円面鏡（第6図6） 小破片で全体の法量や脚部の透し窓の有無は不明である。軽石状の破断面となっており、胎土、焼成いずれの要因によるものであろうか。表面はロクロナデ調整となっている。

その他、カマドかとみられる横化凸帯と透しをもつ破片がある。

末窯の須恵器は總体に胎土が細かく、長胴壺、鍋など本来は土師器であるべき器種にのみわずかに白色網砂が含まれる程度で、他には砂粒の混入が殆んどみられない。焼成も暗灰色の色調のわりに軟質となるものが多いことも併せて特徴としてあげられよう。末窯跡の操業年代についてはどうであろうか。今のところ県下では対比できる須恵器窯は見当らず、強いてあげれば、井波町大蔵遺跡〔岩倉・上野1985〕や、同町高瀬遺跡〔高島ほか1974〕に一部類似する器種がある。すなわち、大蔵遺跡では杯蓋の端部形状、杯Aの一部、鍋の口縁形状で共通するところがあり、高瀬遺跡の杯蓋A、B、杯A、B、長胴壺に似るものがある。反面、末窯跡にある杯A I b、A II b類とした回転糸切痕の内面ヘラミカキ杯や、皿、胴長壺は、両遺跡では土師器やや似せるものがあるものの須恵器では見当らない。これは消費遺跡と生産遺跡との差とする見方のほか、器種分化の新段階との見方もできよう。

一方、近隣地域では金沢市黒田遺跡〔南1979〕のはか高松町箕打・みやの古窯〔平田ほか、1976〕に類似するところがあり、同町若林みずがめ窯にも類例が求められる。

大蔵遺跡は報告者により富来町小袋窯や金沢市戸戸C遺跡26、27溝出土土器との類似性から平安時代前中期（9世紀末）~中期初頭（10世紀初頭）に比定されており、高瀬遺跡は平安時代前半とされてきたところである。同様に黒田遺跡は奈良末、平安前期、中期にあたり、箕打・みやの古窯は9世紀後半と考えられている。こうした周辺の状況から、末窯跡の位置づけをみた場合、まだ不明な点は残るもの、9世紀末~10世紀初頭を想定しておいてよいものと思われる。

（西井）

III. 柴野遺跡採集の中国製磁器について

1~4は柴野遺跡の表採品である。その周辺では、中世の遺物としては珠洲が採集されている。1は龍泉窯系の青磁劃花碗である。体部内部にヘラ及びクシ状工具で花文様を描いている。釉色は緑色で、口縁部外面に釉だまりができる。2は龍泉窯系の青磁蓮弁文碗である。体部外面に片彫りによって蓮弁を作り出している。釉色は青色である。3は同安窯系の青磁碗である。体部内部にヘラによる片彫りとクシ状工具による文様がある。釉は透明度の高いガラス質で、黄緑色に発色している。4は白磁の多角杯である。口縁部は欠損しているが、縁を持つ。釉色は乳白色で、細かい貫入が内外面にある。底部内面に重ね焼きの目跡がある。外面は体部下半から底部にかけては露胎である。高台には4箇所に弧状の抉り込みがある。

さて、中国製磁器は大宰府の編年【横田・森田1978】が進んでおり、それをもとに全国でも分類と編年が進められている。これらの研究成果と北陸の珠洲編年を組み合せれば、中国製磁器の年代が決められる。しかし、上記の遺物は表採品のため、共伴遺物が明確でなく、さらに伝世されることがあるため、年代には幅を持たせて考えておきたい。上記の大宰府編年に従えば、1・2は龍泉窯系青磁碗I類・I~5類に、3は同安窯系青磁碗I類にあたる。1・3はじょうべのま遺跡C・K地区【山本1985】、神田遺跡【横本1982】などから、12世紀後半から13世紀前半である。2は、じょうべのま遺跡I地区【横本1974】、若宮遺跡【狩野1982】などから、13世紀代である。4は弓庄城跡C-3区【宮田1985】に類似があり、15世紀である。

ところで、県内では、中国製磁器が42箇所の中世遺跡から出土していることから【山本・宮田1985】、中世集落での中国製磁器の普及が全国的傾向と同じく進んでいたことが窺える。特に中世前半は土師質土器と珠洲が大半で、中国製磁器が15%以下である。中国製磁器の割合が10%以上のものと、5%以下のものとでは遺跡の性格が違っている【宮田1984】。本遺跡が県内の上記の傾向のどちらにあてはまるのかは、今後の検討となる。

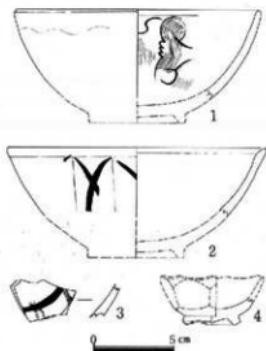
(宮田)

引用・参考文献

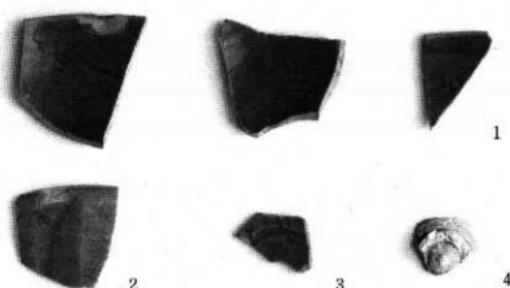
- 石堤村 1959 「石堤村史資料」
- 高岡市 1982 「高岡市史」上巻
- 岩倉節郎・上野 章 1985 「井波町大蔵遺跡出土遺物の紹介」『大境』第9号 富山考古学会
- 岸本雅敏・山本正敏・松島吉信 1985 「じょうべのま遺跡 - C・K地区の調査 -」入善町教育委員会
- 高島忠平・横木 正・舟崎久雄 1974 「井波町高瀬遺跡」「入善町じょうべのま遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書III』 富山県教育委員会
- 平田天秋ほか 1976 「高松町英打・みやの古窯」、石川県古窯跡調査(第5次)概報 石川県教育委員会ほか
- 南 久和 1979 「金沢市黒田町遺跡調査報告書」 金沢市教育委員会ほか
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』
- 山本正敏 1985 「3中世の遺物について」『じょうべのま遺跡』 入善町教育委員会
- 横木 正 1974 「III-2中国製陶磁器」『富山県埋蔵文化財調査報告書III』 富山県教育委員会
- 横木正春 1982 「神田遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告 - 上市町七器石器編 -」 上市町教育委員会
- 狩野 謙 1982 「若宮B遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告 - 上市町土器石器編 -」 上市町教育委員会
- 宮田進一 1984 「II-D中世の遺跡の性格」「北陸自動車道遺跡調査報告 - 上市町木製品・總括編」 上市町教育委員会
- 宮田進一 1985 「IV-1出土遺物による時代区分」「富山県上市町弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- 山本正敏・宮田進一 1985 「富山県」『日本貿易陶磁文献目録1』 日本貿易陶磁研究会

石堤地区古墳群一覧表

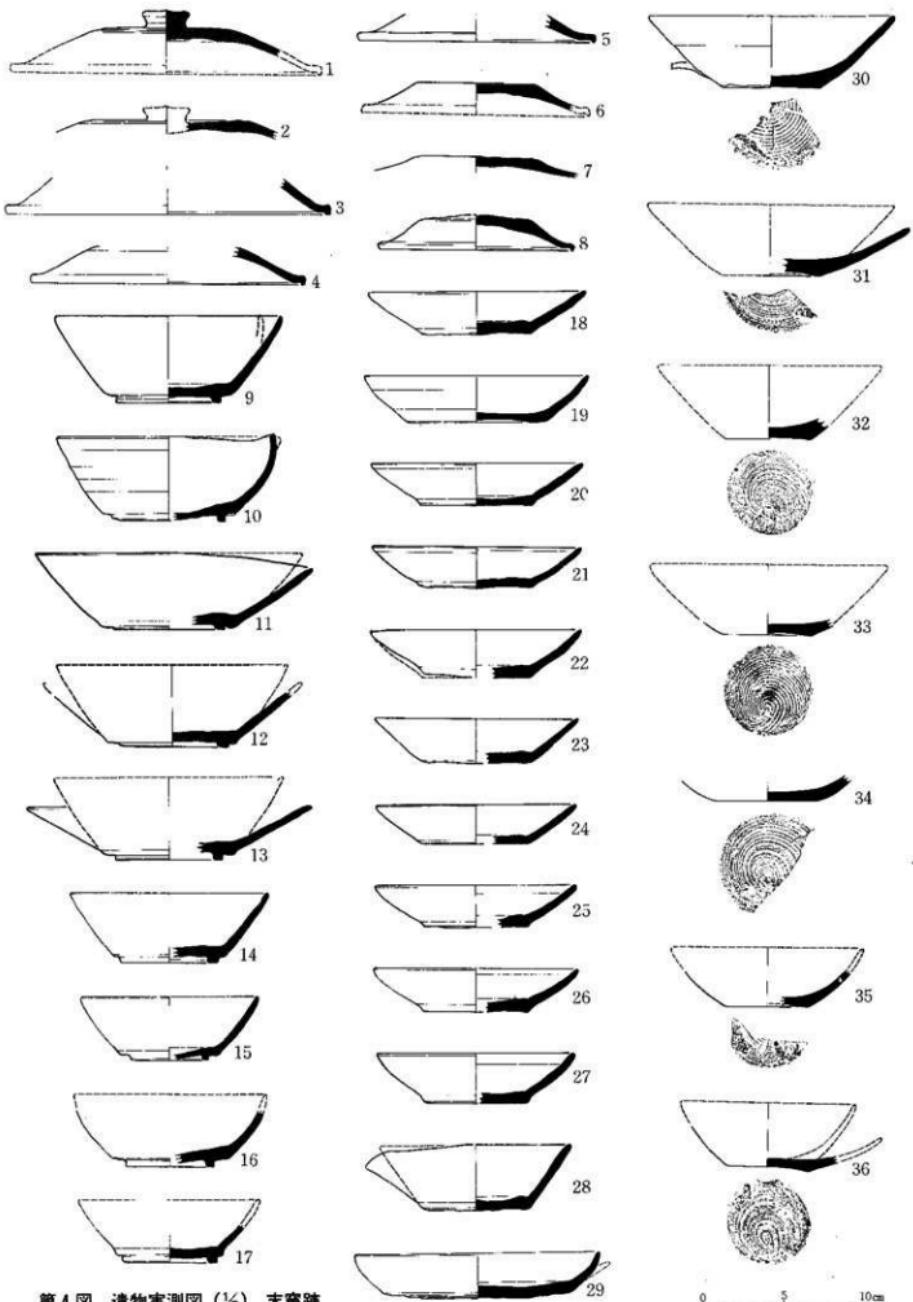
遺跡名	所在地	墳形及び規模(単位:m)			備考
柴野春日古墳	柴野字口割	方墳	10.0×8.0	墳丘高2.0	経塚か 周溝幅1.0
柴野口割Ⅰ古墳	"	1号墳 方墳	16.0×18.0	墳丘高2.0	
		2 " "	8.0×8.0	" 1.0	
		3 " "	9.0×9.0	" 1.0	
柴野口割Ⅱ古墳群	"	1号墳 方墳	8.0×8.0	墳丘高1.0	円墳か 円墳か
		2 " "	10.0×10.0	" 1.0	
		3 " "	17.0×15.0	" 2.0	
		4 " "	17.0×14.5	" 3.0	
		5 " "	12.0×12.0	" 2.0	
		6 " 円墳	10.0	" 1.5	
		7 " "	6.0	" 1.2	
		8 " "	11.0	" 1.5	方墳か 方墳か
		9 " "	8.0×8.0	" 1.2	
柴野口割Ⅲ古墳群	"	方墳	30.0×30.0	墳丘高3.5	前方後方墳か(全長64.0)
柴野口割Ⅳ古墳群	"	1号墳 円墳	10.0	墳丘高1.0	
		2 " "	8.0	" 1.0	
麻生谷殿谷内古墳群	麻生谷字殿谷内	1号墳 方墳	19.0×21.0	墳丘高2.5	
		2 " "	5.5	" 0.5	円墳か
		3 " "	7.0	" 0.5	"
		4 " "	5.0	" 0.6	"
石堤柏堂古墳群	石堤字柏堂	1号墳 円墳	15.0	墳丘高1.2	方墳か
		2 " "	短径22.0 長径26.0	" 2.5	
		3 " "	13.0	" 1.5	
		4 " "	8.0	" 1.0	
		5 " "	13.5	" 1.5	
		6 " "	短径10.0 長径12.0	" 2.0	
		7 " "	8.0	" 1.5	
		8 " "	10.0	" 1.5	
		9 " "	7.0	" 0.6	
		10 " 方墳	11.0×11.0	" 1.3	
		11 " 円墳	8.0	" 1.0	岩崎石露出
		12 " "	8.0	" 1.0	"



第2図 中国製磁器実測図

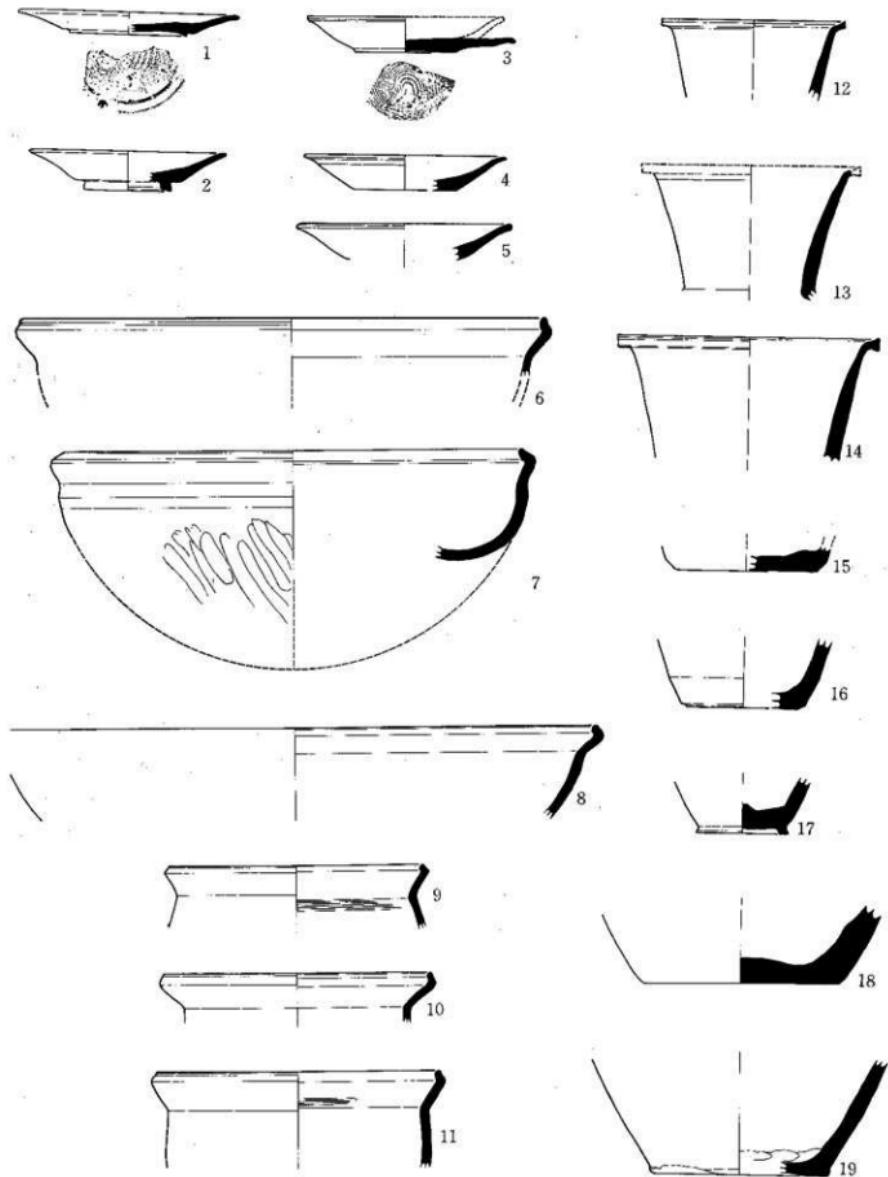


第3図 中国製磁器写真



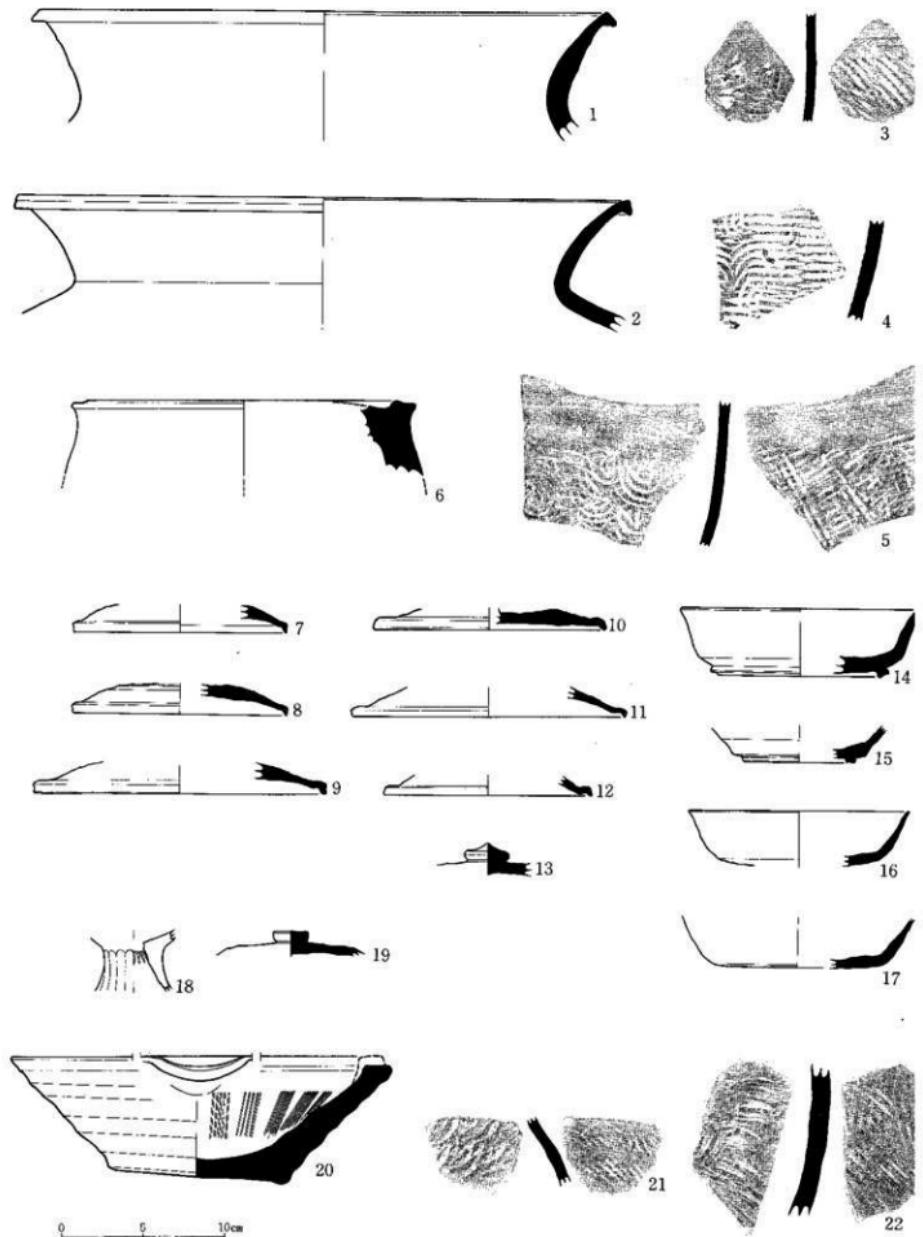
第4図 遺物実測図(3/3) 末窯跡

0 5 10cm

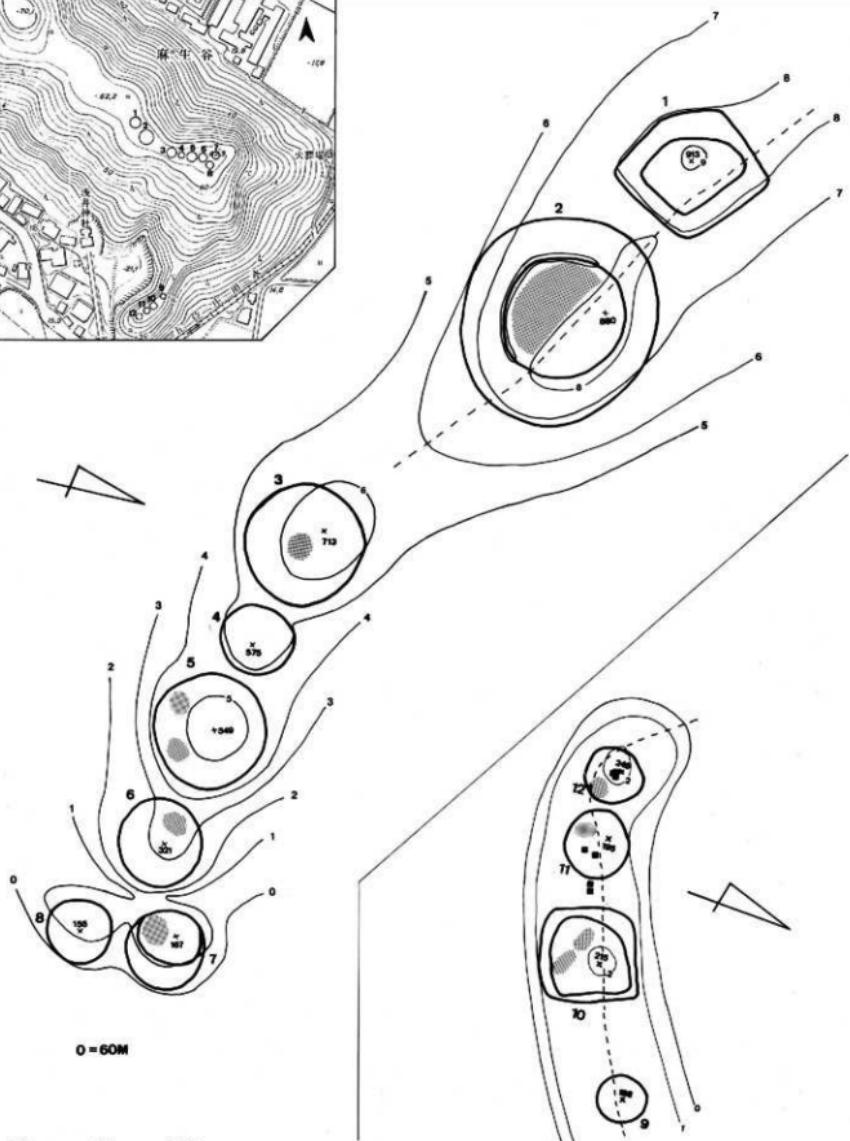


— 5 — 10cm

第5図 遺物実測図 父窯跡



第6図 遺物実測図 (1/3) 1~6末窯跡 7~17 21・22柴野遺跡 18~20八口遺跡



第7図 石堤柏堂古墳群実測図 (1/600)



勝木原オジャラ遺跡



八口遺跡



末窯跡



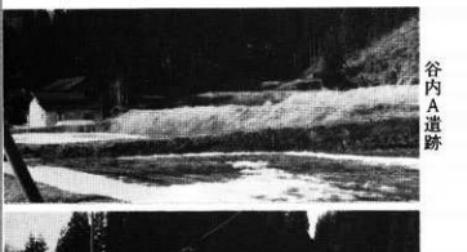
柴野遺跡



守善寺遺跡



麻生谷遺跡



谷内A遺跡



石堤遺跡



石堤長光寺遺跡



旧柴野アサバタケ遺跡



麻生谷新生園遺跡



柴野城ヶ平城跡



柴野高ノ宮城跡



麻生谷殿谷内古墳群



柴野口割I～IV古墳群



柴野春日古墳



麻生谷殿谷内古墳群



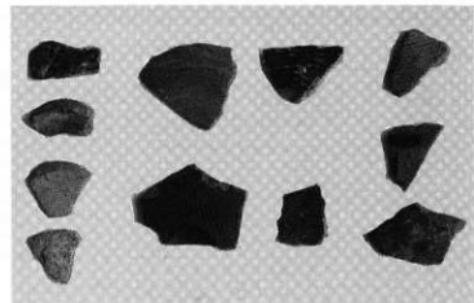
石堤柏堂古墳群



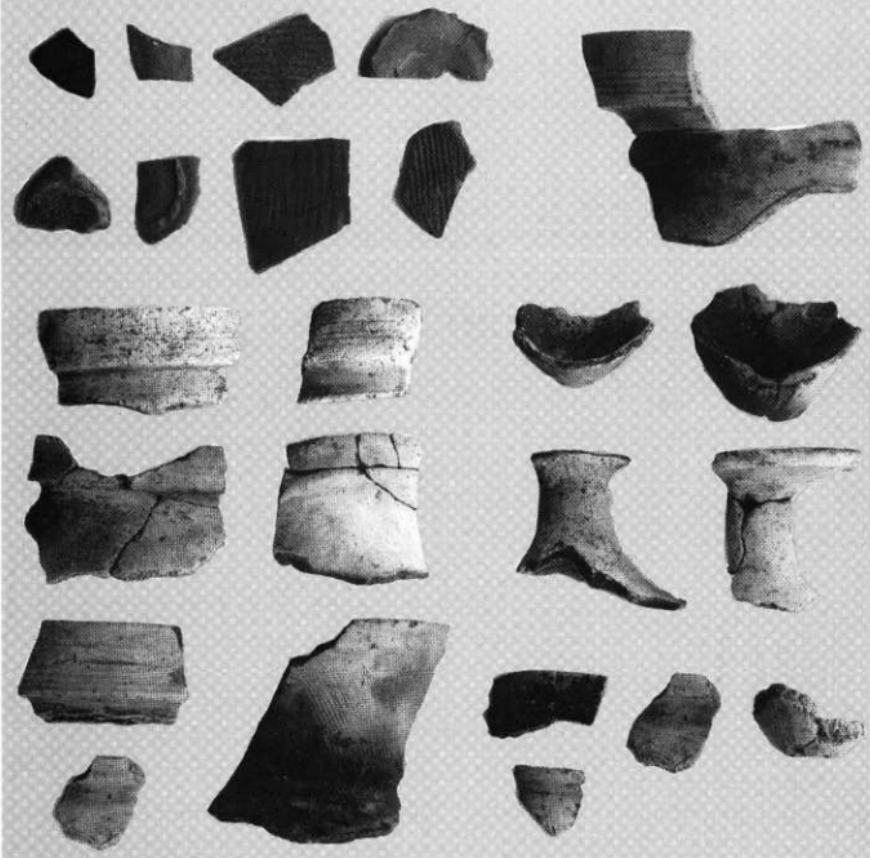
石堤柏堂第12号古墳岩崎石



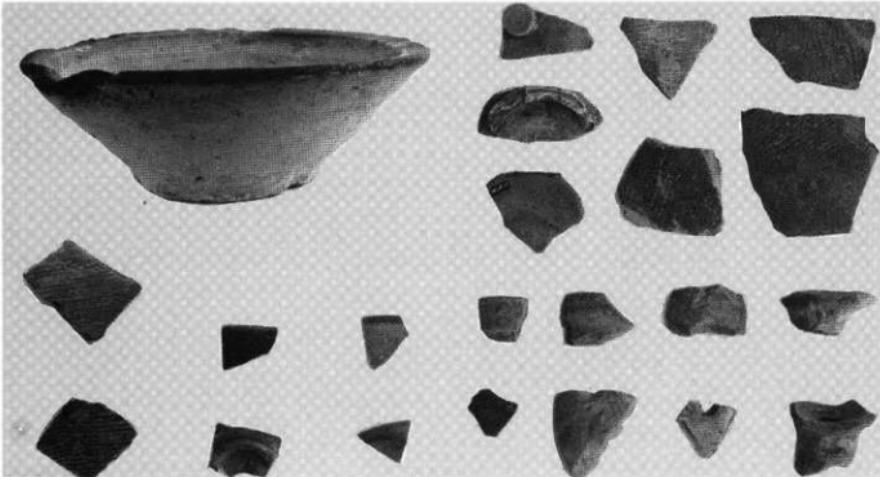
未窯跡出土



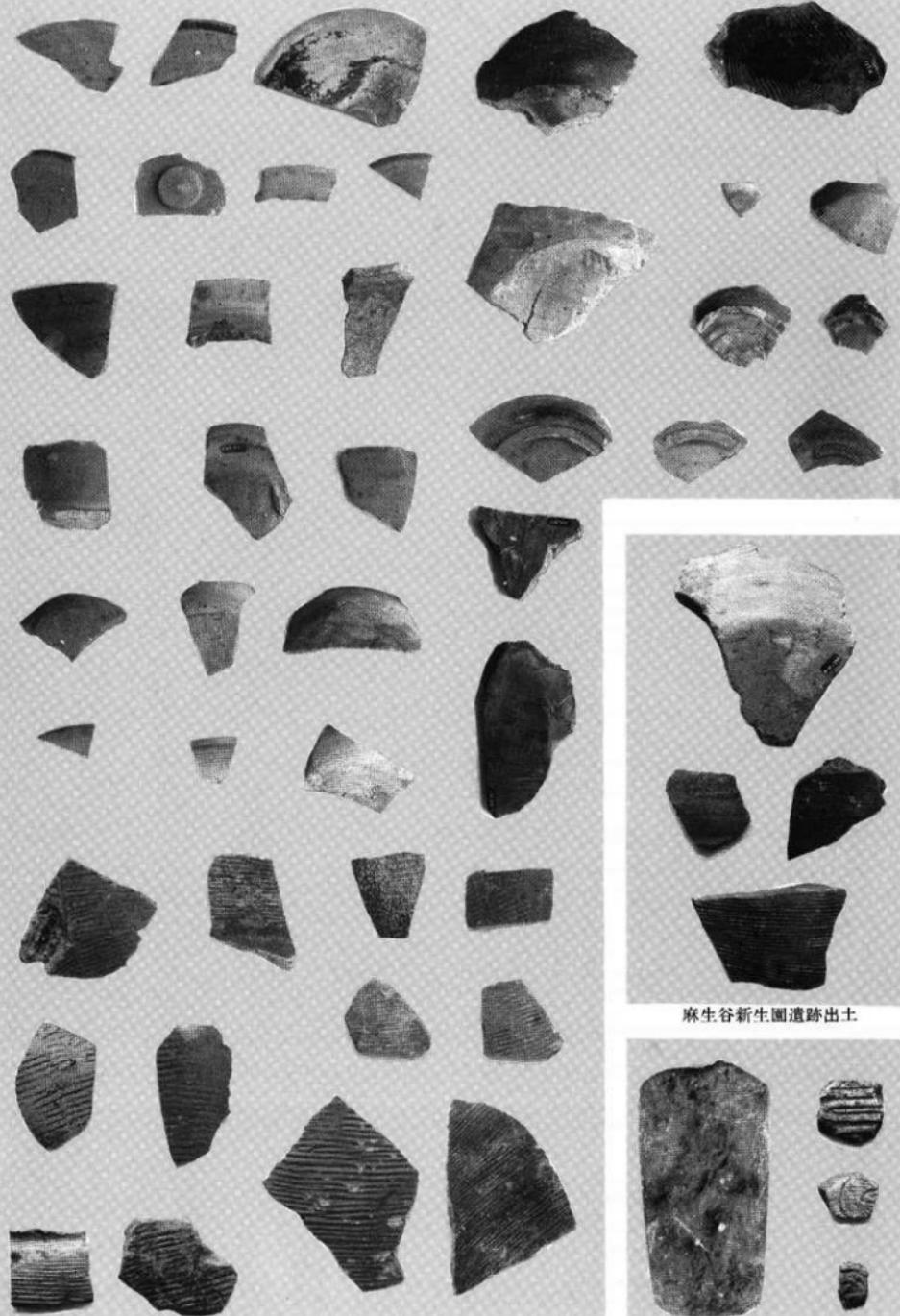
守善寺遺跡出土（1：3）



麻生谷遺跡出土

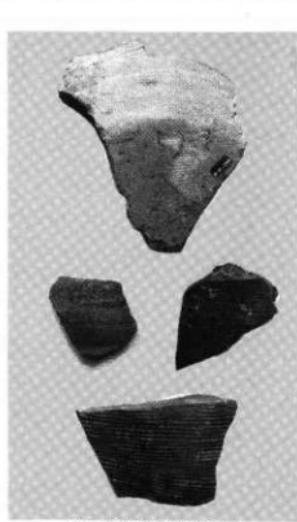


八口遺跡出土



柴野遺跡出土

オジャラ遺跡出土 (1 : 3)



麻生谷新生園遺跡出土



富山県高岡市

**西山丘陵埋蔵文化財
分布調査概報Ⅲ**

発行日 昭和61年3月28日

発行 高岡市教育委員会

編集者 (株) 日康堂